



Title	分裂自動詞性の本性について : 言語類型論の観点から見た非対格仮説とその問題点
Author(s)	鄭, 聖汝
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2005, 45, p. 19-58
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4487">https://doi.org/10.18910/4487</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 分裂自動詞性の本性について\*

——言語類型論の観点から見た非対格仮説とその問題点——

鄭 聖 汝

## 1. 問題提起

格標示システムに基づく言語類型には、周知のように、対格型言語と能格型言語に大別される二つのタイプがある (Comrie 1978, Dixon 1979, 1994, 柴谷 1989, 角田 1991)。そこに, Sapir (1917) 以来, 動格型言語タイプが認められると, 三つのタイプがあることが広く知られるようになった (DeLancey 1981, 1985, Harris 1982, Merlan 1985, Mithun 1991, クリモフ 1999 など。高見・久野 2001 も参照)。つまり, 格標示の現れ方を広く見渡すと, 言語のふるまいは一律でなく, 少なくとも三つのパターンがありうるということが認められたのである。

一方, Perlmutter (1978) の非対格仮説によれば, 自動詞のふるまいにおいては世界のすべての言語は一律であり, この仮説と異なるタイプは存在しない。すなわち, すべての言語において自動詞は非能格・非対格と呼ばれる二種類があり, そしてそれは言語すべてに通用する同一の意味基準によって区別でき, 意味的にも均質 (homogeneous) である, とされる普遍的配列仮説 (Universal Alignment Hypothesis) が唱えられている。しかも, 非能格・非対格の区別が表す内容とは, すべての言語の自動詞システムは, 実は動格型言語の格標示システムと同じように活性・不活性 (active-inactive) である, と主張していることとは等しい。

この二つの状況——格標示の現れ方に基づく言語の類型と自動詞のふるまいに基づく言語の普遍性——を照らし合わせてみると, 次のような疑問が浮かび上がる。

- (i) 自動詞においては, なぜ, 動格型システムのように, 均質に分裂することのみが言語唯一の普遍性である, と主張できるか。
- (ii) 自動詞のふるまいにおいては, なぜ, 不均質性を含むようなことは起こりえない, と主張できるか。

すなわち, (i) を主張するためには, (ii) の不均質の状況はない, という裏づけが必要であろうが, 非対格仮説はこのことが十分検討された結果得られた結論なのかどうか, ということには問題があるように思われる。<sup>(1)</sup>つまり, 自動詞のシステムにおいては動格型以外の可能性はありえないということが, 本当に証明されたものなのかどうか, ということについて疑問が残るわけであり, 従って, 十分な経験的事実に基づいた仮説かどうかについて

は、まだ検討の余地があるように思われるのである。

というのは、非対格仮説を主張する上で、この仮説の経験的基盤として強い根拠となった動格型言語の格標示システムさえも、非対格仮説に協力的な言語がある一方で（たとえば、Harris 1982）、実は言語には多様な意味基盤があり、決して一律でない、という報告もある（たとえば、Mithun 1991、Merlan 1985も参照）。また、同じように非対格仮説の経験的基盤として、Perlmutter（1978）によって直接取り上げられた自動詞ベースの非人称受身の現象にも、言語による、決してランダムではない、異なる意味基盤があることが指摘されている（Shibatani 1998）。また、最近は使役に関しても言語によってサイズが異なることや、連続性などが指摘されている（Shibatani & Pardeshi 2002）。

本稿の目的は、このように言語によって一律でない状況は一体何を表しているものなのかを追究することである。別の言い方をすると、非対格仮説が十分な経験的事実に基づいて構築された仮説かどうか、ということとその根本から問いただし、分裂自動詞性の本来の姿を追究することである。そのためには、Perlmutter（1978）が非対格仮説を主張するさいに経験的基盤として提供した言語現象である、自動詞ベースの受身や分裂主語システム、それに使役交替も加えて考察を行い、それにより、非対格仮説が果たして妥当な主張であったのかどうかを検討する必要がある。

結論としては、分裂自動詞性は、動格型システムが表す活性・不活性（active-inactive）のように、意味的に均質な要素のみにより構成されるという普遍的一配列ではなく、不均質性も受け入れており、かつ言語による線引きも異なり、従って、サイズも異なる、ということが言語の自然な姿であることを提示する。さらに、動格言語の格標示システムからは、少なくとも二つの有意義な意味基準があることを提案する。これにより、非対格仮説の普遍的一配列仮説は、普遍的でないことを検証する。

## 2. 用語上の問題および定義

前節で述べたように、格標示システムに基づく言語類型では、対格型言語と能格型言語に大別される二つのタイプがある（以下、対格言語、能格言語と表記する）。対格言語の格標示システムとは、格標示のコード化において自動詞の主語 S と他動詞の主語 A が同一に取り扱われ、P が別扱いを受けることをいう。すなわち、S と A が一つにグルーピングされ、主格または無標格をとり、そこから排除された P だけが対格をとる。これに対して、能格言語の格標示システムとは、自動詞の主語 S と他動詞の目的語 P が同一に取り扱われ、A が別扱いを受けることをいう。すなわち、S と P が一つにグルーピングされ、絶対格または無標格をとり、そこから排除された A だけが能格をとる。（Dixon 1979, 1994, Comrie 1978, 柴谷 1986, 1989, Shibatani 1988, 宮岡 1986, 松本 1986, 角田 1991など。）要するに、

能格と対格は、二つの言語タイプの他動詞構文を特徴付けるものであることがわかる。  
 NOM；主格，ACC；対格，ERG；能格，ABS；絶対格， $\phi$ ；無標格。

- (1) a. 対格型格標示：S=A (=NOM,  $\phi$ )  
 自動詞構文：  $\textcircled{\text{S}}$  *Vint*  
 他動詞構文：  $\textcircled{\text{A}}$  P-ACC *Vtr*
- b. 能格型格標示：S=P (=ABS,  $\phi$ )  
 自動詞構文：  $\textcircled{\text{S}}$  *Vint*  
 他動詞構文： A-ERG  $\textcircled{\text{P}}$  *Vtr*

ところが、自動詞システムを記述するさいにも、上記のような格標示システムの記述用語が（その通りではないが）導入され、周知の通り、非対格仮説では非能格動詞・非対格動詞という述語が誕生する<sup>(2)</sup>。さらに、生成文法の枠組みでは非対格性と同等の意味で‘能格性’という用語が当てられた（Burzio 1986, Baker 1988, Miyagawa 1989など<sup>(3)</sup>）。これらが言語類型論の記述用語である能格・対格などに依拠した用語法であることは疑う余地がない。しかしながら、その実質的な内容を見ると、微妙なずれが生じており、決して同等の概念でないこともわかる。具体的にいうと、非対格・非能格という区別は、一見類型論でいう能格型・対格型のシステムを基盤にしているかのように見えるが、実は、先ほども述べたように、むしろ動格型システムの内容である活性・不活性（active-inactive）の概念である。にもかかわらず、用語上は活性・不活性でなく、非能格・非対格と名づけられた。しかも、とくに生成文法の枠組みで用いられた‘能格性’は、能格言語の格標示システムを基盤に厳密に定義された能格性と大変紛らわしい。そのため、用語間の関係を正しく理解するのに相当なる困難が生じていることも事実のようである（Dixon 1994, 高見・久野 2001および鄭（近刊）を参照）。

このような状況を理解するために、格標示システムに基づく言語類型の三つのパターンを次のように示してみよう。S<sub>a</sub>；自動詞の行為者主語（agentive subject），S<sub>p</sub>；自動詞の非行為者主語（patientive subject）。

- (2) a. 対格型システム：  $\textcircled{\text{S (S}_a\text{/S}_p\text{)}} = \text{A}$  / P
- b. 能格型システム：  $\textcircled{\text{S (S}_p\text{/S}_a\text{)}} = \text{P}$  / A
- c. 動格型システム：  $\textcircled{\text{S}_a = \text{A}}$  /  $\textcircled{\text{S}_p = \text{P}}$

この図を見ると、非対格仮説における非能格・非対格の区別は、(2c)のように意味的に均質な要素のみによって分裂される(と仮定される)、動格型システムをさすものであって、決して(2a,b)のような対格型や能格型のシステムをさすものでないことは明らかである。一方、能格性とは本来は(2b)のように、むしろ意味的に不均質な要素によって構成されたSが、Pと同一に取り扱われ、Aだけが別扱いを受けることをいう。つまり、能格性の本来の定義は非対格性あるいは生成文法の枠組みでいう‘能格性’とは異なるものである。

本稿で用いられる方法論は、格標示システムとパラレルな関係が自動詞のふるまいにおいても見られるかどうか、を調べることである。具体的にいうと、自動詞システムにおいては、能格型や対格型のように、意味的に不均質なS全体とPが同一に取り扱われるような状況は存在しないのか、ということ積極的に調べることに焦点が当てられる。そして、もしそのような状況が存在しなければ(つまり、反対証拠が見つからなければ)、そのときは、非対格仮説を正しく受け入れることができるかもしれない。

以上のような立場から、本稿では、格標示システムとパラレルな関係が自動詞のふるまいにおいて見られた場合、それぞれを意味的対格型システム(Semantic Nominative-accusative system)、意味的能格型システム(Semantic Ergative-absolutive system)、意味的動格型システム(Semantic Active-inactive system)と呼ぶことにする。<sup>(4)</sup>なお、これらの用語は、能格言語において能格性が現れる二つのレベル——形態的能格性と統語的能格性——を考慮に入れたものである。<sup>(5)</sup>次のように定義する。

(3) 意味的対格型システム(または、意味的対格性)

自動詞のふるまいにおいて、 $S_a=A$ を共通の意味基盤とし、 $S_p$ もその中に取り込むことができる場合、これを意味的対格型システムと呼ぶ。

(4) 意味的能格型システム(または、意味的能格性)

自動詞のふるまいにおいて、 $S_p=P$ を共通の意味基盤とし、 $S_a$ もその中に取り込むことができる場合、これを意味的能格型システムと呼ぶ。

(5) 意味的動格型システム(または、意味的動格性)

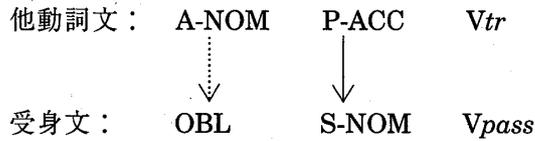
自動詞のふるまいにおいて、 $S_a=A$ と $S_p=P$ のように、均質の意味要素のみにより分裂される場合、これを意味的動格型システムと呼ぶ。

(3-4)の定義によると、S(自動詞の主語)には意味的に不均質な(heterogeneous)要素が含まれなければならない。もしそうでなければ、対格型や能格型ではなくなり、動格型になることを意味する。そして、対格型が $S_a=A$ を基盤に $S_p$ を受け入れる方向へと一般化したものであり、能格型は $S_p=P$ を基盤に $S_a$ を受け入れる方向への一般化したもの

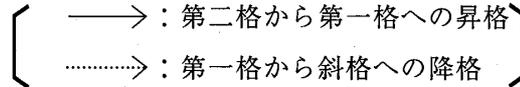
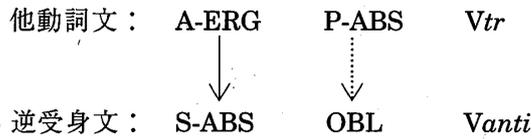
であることが仮定されているが、これは動格型をベースにおいた考え方である。<sup>(6)</sup> 実際、このような考え方を支持するものとして、対格言語における受身と能格言語における逆受身 (antipassive) の現象がある。

簡単にまとめると、次のようである (Shibatani 1988, Tsunoda 1988参照)。OBL; 斜格, pass; 受身, anti; 逆受身。

(6) a. 対格言語



b. 能格言語



受身文の S と逆受身文の S を、両方ともに派生主語という意味で *d*-S と表記しよう。すると、対格言語と能格言語は、両方とも S の中に (二次的に) 派生主語 *d*-S を参加させる方略を持っていることがわかる。(動格言語はこの二つのヴォイス現象両方に関して敏感でないことも指摘しておく。) ところが、S の範疇に二次的に加わる *d*-S の意味特性が何か、という内容の面に関して、両者はまったく異なっている。能格言語は他動詞の動作主 (後に *S<sub>a</sub>* となる) が S の中に新たに受け入れられるシステムであるが、対格言語は他動詞の目的語 (後に *S<sub>p</sub>* となる) が S の中に新たに受け入れられるシステムである。このような状況から見ると、上記のような考え方は説得力がある。

### 3. 非対格仮説の形式化と経験的基盤

前節では、Perlmutter の非対格仮説の問題点について大まかなことを述べた。ここでは、いかなる経験的基盤の下で、それがどのように形式化されていくのか、というその過程をより詳しく見ていきたい。前節でも述べたように、Perlmutter (1978) は、関係文法の枠組みの中で次の二点を柱とする、分裂自動詞性に関する非対格仮説を提出した。第一に、世界のすべての言語において自動詞は一枚岩でなく、非能格動詞 (unergative verbs) と非対格動詞 (unaccusative verbs) と呼ばれる二種類がある。第二に、この二種類の自動詞は動詞の

意味クラスだけによる単なる区別でなく、統語構造によって動機付けられている。非対格動詞の主語は、基底構造では他動詞の直接目的語と同じ位置のものだが、前者はそうでない (Levin & Rappaport Hovav 1995, 影山 1993も参照)。

ここで仮定される基底構造を、便宜上、生成文法の枠組みでの形式化に従い表示すると、次のようである (Burzio 1986)。

- (7) a. 非能格動詞: [s NP [vp ]]  
 b. 非対格動詞: [s \_\_\_\_ [vp NP]]

非能格動詞の唯一の NP は、基底構造でも主語 (生成文法の枠組みでは、外項) であるため、非能格は目的語 (生成文法の枠組みでは、内項) をもたない動詞であるとされる。これに対して、非対格動詞の唯一の NP は、基底構造では目的語 (内項) であり、従って、非対格は主語 (外項) をもたない動詞であるとされる。

ここで、基底構造と表層構造 (関係文法の枠組みでは、初期文法関係と最終文法関係) の間を関係付ける必要が生じ、派生の概念が導入されることになる。すると、非対格の主語は基底構造の目的語から昇格した派生主語である、という位置付けがなされる (Perlmutter & Postal 1984)。

この前提 (非対格の主語が派生主語であること) を受け入れると、非能格動詞と非対格動詞の主語は、表面上は同じように見えるが、実際 (基底構造) は異質のものとなり、よって、意味だけでなく、統語的にも質の異なる二種類の自動詞がある、という主張が可能となるのである。

ここで注目されたいのは、この仮説の背景にある経験的基盤である。実際に、Perlmutter (1978) が経験的証拠として取り上げたのは、オランダ語 (Dutch) やトルコ語が見せる非人称受身の状況と Boas & Deloria (1939) が active-neutral と説明したダコタ語 (Dakota) の分裂主語システムの状況であった。<sup>(7)</sup> 分裂主語システムについては6節で詳細に取り上げることにして、ここでは Perlmutter (1978) が提示したオランダ語の非人称受身の例を紹介する。

(8) オランダ語

- a. Ze werken hier veel. (自動詞文)  
 'They work a lot here.'  
 b. Hier wordt (er) veel gewerkt. (非人称受身文)  
 'It is worked here a lot.'

(9) a. In dit weeshuis groein de kinderen erg snel. (自動詞文)

'In this orphanage the children grow very fast.'

b. \*In dit weeshuis wordt er door de kinderen erg snel gegroeid. (非人称受身文)

'In this orphanage, it is grown fast by the children.'

Perlmutter (1978) によれば、オランダ語における自動詞の非人称受身は、(8) の *werken* 'work' のような動詞では成立するが、(3) の *weeshuis* 'grow' のような動詞では成立しない。他にも、英語の *dance*, *cry*, *swim* のような自動詞は非人称受身を許すが、*rot*, *burn*, *drown* のような自動詞は許容しない。また、トルコ語の自動詞の非人称受身もオランダ語と大体同じ結果が得られるということから、次のような強い主張がなされた。<sup>(8)</sup>

(10) いかなる言語においても非対格動詞を基盤に受身文 (非人称受身) を作ることはできない。(Perlmutter & Postal 1984 : 107)。

そして、(10) はたまたま偶然ではなく、動詞の意味と統語現象が一定の関係をもつことによって現れたと考えると、統語構造に動機付けられた (7) の形式化は妥当である、という主張が成り立つのである。

言い方を変えると、(7) の形式化には理論的前提がある。それは、非対格動詞だけが非人称受身を成立させない理由を説明するために、非対格の主語を受身文の主語と同じように基底構造の目的語であると仮定することであった。すなわち、この前提から出発すると、表層構造では受身文と同じように派生主語であるとされる<sup>(9)</sup>。すると、非対格は (すでに派生構造なので)、さらなる派生を繰り返すこと (目的語から一度昇格したものが繰り返し昇格すること) はできない (もしそうなるとうる法的な文を作ってしまう) とされ、だから、受身は派生できない、という結論を (循環的に) 導いている。つまり、非対格が非人称受身を作らない言語事実を基に (次節でその真偽を検討するが)、この二つの構造を同じように仮定し、この仮定により、非対格は非能格と構造的に異なると主張したのである。

上記の内容を、今度は生成文法の枠組みからごく大雑把に説明してみよう。非能格の主語と他動詞の主語は、意味役割の上で動作主 (agent) であると同定できる。また、非対格の (表層の) 主語と他動詞の目的語も、意味役割の上では対象 (patient) であると同定できる。このことから、非対格の主語を基底構造の目的語であると仮定すれば (すなわち、意味の問題を統語上の位置関係に置き換えて解釈すれば、ということ!), 意味役割と文法関係が一定の普遍的な対応を見せるということが言える。(さらに、動格言語をみると、この関係が格標示システムによって明示的に表示されるので、確かなる証拠もあるとされる。) し

たがって、(7)の形式化は妥当である、とされるのである。

実際、GB理論の枠組みで提案された Baker (1988) の意味役割付与一様性仮説 (Uniformity of Theta Assignment Hypothesis) は、同じ意味役割を担う名詞句は基底構造において同じ位置に表出される、ということを保証する仮説である。これにより、非対格自動詞の唯一の名詞句は他動詞の目的語と同様に基底構造では目的語(内項)の位置にくることとなる。そして、Burzio (1986) の一般化と Chomsky (1981) の格フィルターにより、(7)の形式化に対する理論的精緻が極まる。非対格動詞は対象項(内項)しかもたず目的語の位置に生起するが、そのままでは格をもらうことができない。なぜならば、外項をとる動詞だけが対格を付与できるからである(Burzioの一般化)。そこで、格を持たないNPは不適格文とされる(Chomskyの格フィルターに違反する)ので、格をもらって適格な文を作るためには目的語の位置から主語(外項)の位置に移動せざるを得ない、というのがGB理論の枠組みにおける(7)の形式化に対する理論上の理屈(theoretical logic)である。(Baker 1988, 影山 1993: 43-48参照)。

以上、オランダ語とトルコ語の非人称受身のふるまいから(10)のような強力な主張がなされ、それが(7)の形式化の基盤となったことを述べた。さらに、そこから理論的な精緻が極まると、(7)は言語普遍の仮説としてその妥当性が支持されていくことを見た。

しかし、非対格が受身と同様に、他動詞構造を基盤にして導き出されたとされるこの仮説には(Levin & Rappaport Hovav 1995, 影山 1996など)、次のようなごく素朴な疑問がある。多くの言語において、非対格は受身(有標)と異なり、形態的には単純な形(無標)をとる場合が多い。すなわち、英語以外の多くの言語において形態派生の方向性を考えた場合、他動詞構造を基盤に非対格が派生されるという仮定は何だか不自然である。たとえば、日本語の‘開く’と‘開ける’、‘乾く’と‘乾かす’は、形態派生の方向性から見ると、自動詞から他動詞への派生である<sup>(10)</sup>。しかし、(7)に基づく構造派生の観点からは、その逆の他動詞構造から自動詞への派生が仮定される。すると、なぜ形態的に派生形である他動詞が構造的にはより基本であり、また、形態的には基本形である非対格動詞が構造的には派生であるとされるか、納得しかねる<sup>(11)</sup>。しかしながら、このような素朴な疑問さえ検証のしようがない。なぜならば、非対格性の仮説は上記の(7)を理論的前提とするため、それ以上は追究できない、というジレンマがあるからである。

すると、(7)の形式化の妥当性を検証するためには、十分な事実に基づいた仮説かどうかを調べるしかないように思われる。すなわち、(10)の一般化を導き出した経験的基盤そのものを点検することである。次の三点を調べれば十分であるように思われる。

第一に、どの言語においても、非人称受身に参与する自動詞の範囲は意味的に均質なメンバーのみにより構成され、かつ非対格動詞は参与できないのだろうか。第二に、どの言語に

おいても、使役交替に参加する自動詞の範囲は意味的に均質なメンバーのみにより構成され、かつ非能格動詞は参加できないのだろうか。第三に、動格言語の分裂主語システムの状況は、どの言語においても意味的に同じ基準のみにより自動詞の分裂が引き起こり、かつ  $S_p=P$  と  $S_a=A$  のような基準のみ許すのだろうか。この三点を調べると、自動詞の意味と文法関係の間の自然な対応がその姿を表出するであろう。<sup>(12)</sup>

その前に、上記のような統語基盤の理論的背景のもとに、意味的基準として Perlmutter (1978: 162-163) が提示した自動詞の二分類、すなわち、非能格動詞と非対格動詞のリストを挙げておく。Perlmutter によれば、例示は英語であっても、他言語にも同じように通用できる。(以下、前節で用いた用語法を導入し、非能格は  $S_a$  動詞、非対格は  $S_p$  動詞と記し、併用する。)

(11) 非能格自動詞 ( $S_a$  動詞)

a. 意志的な行為を表す動詞

work, play, speak, talk, smile, grin, frown, think, skate, ski, swim, hunt, jog, walk, laugh, cry, dance, walk, daydream, etc. 発話様態動詞: whisper, shout, mumble, grumble, growl, etc. 動物の鳴き声: bark, neigh, meow, roar, quack, chirp, whinny, oink, etc.

b. 無意識の生理的現象

cough, sneeze, hiccough, sleep, cry, weep, belch, burp, vomit, defecate, urinate, etc.

(12) 非対格動詞 ( $S_p$  動詞)

a. 形容詞ないしそれに相当する状態動詞: サイズ, 姿, 色, 重さ, 匂い, 心的状態などを表す述語。

b. 対象物を主語に取る動詞

burn, fall, drop, sink, float, slide, glide, soar, flow, roll, hang, dry, boil, freeze, melt, die, open, close, break, split, fill, grow, increase, decrease, tremble, sit (involuntary), etc.

c. 存在と出現を表す動詞

exist, happen, occur, appear, disappear, arise, ensue, result, show up, end up, turn up

d. 五感に作用する非意図的な現象

shine, sparkle, glitter, smell, stink, jingle, etc.

e. アスペクト動詞

begin, start, stop, cease, continue, end, etc.

f. 継続

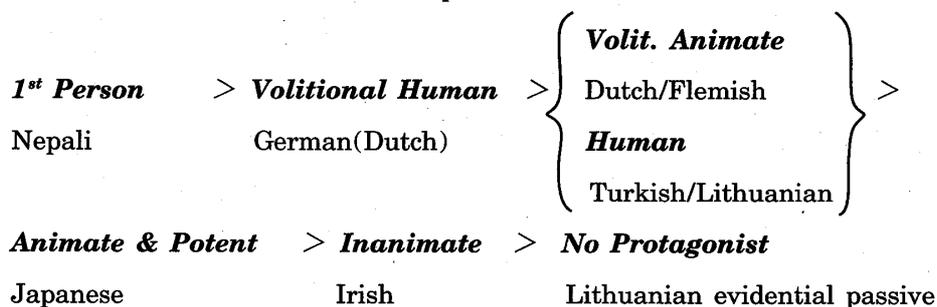
last, remain, stay, survive, etc.

#### 4. 自動詞ベースの受身

日本語の迷惑受身を除くと、世界の多くの言語に見られる自動詞ベースの受身は、ほとんどが非人称受身である。この非人称受身の状況、とりわけオランダ語とトルコ語を基に、Perlmutter (1978) と Perlmutter & Postal (1984) は (10) のように、非人称受身に関与する自動詞は非能格だけであり、いかなる言語においても非対格を基盤に受身文（非人称受身）を作ることはできない、という強力な主張をした。つまり、非人称受身が非対格仮説の妥当性を支持する経験的証拠として提示されたわけである。

しかしながら、このような主張は Shibatani (1998) が提示した自動詞ベース受身のパラメータによると、十分な事実に基づいたものでないことは明らかである。

#### (13) Parameters for intransitive-based passives



Shibatani (1998) によると、ドイツ語やオランダ語の非人称受身は、意志性の概念が重要である。従って、*skate* のように意志的な動詞は許されるが、*grow*, *drown* のように無意志的な動詞は許されない。一方、トルコ語やリトアニア語では、意志性よりも人間かどうかがより重要な概念である。それで、‘子供が育つ’ のような文はドイツ語やオランダ語では許されないが、トルコ語やリトアニア語では受身文が作れる。しかし、‘ウサギが早く育つ’ や ‘草が早く育つ’ のように動物や無生物が主語である場合は、トルコ語やリトアニア語でも受身を許容しない。これに対して、アイランド語は ‘草が早く育つ’ のような無生物までも受身文を作ることができる。トルコ語やリトアニア語においてとくに注目される点は、意志的な動詞でも動物が主語である場合は受身を成立させない、ということである。従って、‘ウサギが逃げる’ や ‘狼が吠える’ のような文は、トルコ語やリトアニア語では受身文を作ることができない。(詳細は Shibatani 1998 : 96-101を参照。)

一方、日本語の迷惑受身は有生性と潜在能力 (animate & potent) の概念が重要である。(8)に見られるように、まずは意志性の概念を基にして人間と動物が受け入れられ、次に潜在能力という概念により意志性のない人間や自然現象までもその中に取り込み、さらには、無生物でも潜在能力をもつものと見なされれば許される。(例は、Shibatani 1998: 100から引用。高見・久野 2001も参照されたい。)<sup>(13)</sup>

- (14) a. 太郎は、急に花子に走られた。(花子が走る)  
 b. 太郎は、犬に一晚中吠えられた。(犬が吠える)  
 c. 太郎は、花子に死なれた。(花子が死ぬ)  
 d. 太郎は、雨に降られた。(雨が降る)  
 e. 太郎は、夏草に生い茂られた。(夏、草が生い茂る)  
 f. \*太郎は、急に戸に開かれた。(戸が開く)

このようにより広範囲のデータを考慮に入れると、(10)の主張は少ない事実に基づいた過剰一般化であることが明らかである。

ここで、(13)のパラメータに基づき、自動詞ベース受身の拡張の一般化および制約をまとめてみよう。受身が、典型的には他動詞を基盤に起こる文法現象であることを考えると、(15a)が妥当であろう。また、(10)の主張も(15b)のように捉えなおす必要があろう(柴谷 2000: 154も参照)。

(15) 拡張の一般化と制約 (I) : 受身の場合

- a. 受身 (非人称受身・迷惑受身も含めた) は、 $S_a = A$  (非能格と他動詞) を共通の意味基盤とし、そこに  $S_p$  動詞 (非対格) を受け入れる方向へと一般化の拡張をみせる。  
 b. ほとんどすべての言語において  $S_a$  動詞を排除し、その上に  $S_p$  動詞を基盤にした受身文を作ることはできないか、非常に困難である。

日本語の迷惑受身が見せる一般化のパターンは、(15a)を非常によく反映していることがわかる(例(14)参照)。これを2節の(3)の定義に基づき、‘意味的対格型システム’のパラダイムであるとする、受身接辞 *rare* は(‘意味的動格型システム’ではなく)‘意味的対格型システム’の接辞であると考えることができよう。

## 5. 使役交替

Haspelmath (1993) は、世界の21の言語の中から31個の動詞を選び出し、それらの使役（一起動）交替（彼の用語では *inchoative-causative alternation*）の状況を調査して、次のような一般化を導き出した。

- (16) A verb meaning that refers to a change of state or a going-on may appear in an inchoative/causative alternation unless the verb contains agent-oriented meaning components or other highly specific meaning components that make the spontaneous occurrence of the event extremely unlikely. (p.94)

すなわち、*break*, *open* のように状態変化を表す動詞や *roll*, *spin* のように継続運動を表す動詞は使役交替（自他交替）に参加できるが、*run*, *play*, *hit*, *kick* のように行為を表す動詞は使役交替を表さない。これを支持する例として、意味的なミニマルペアの *wash*, *execute*, *tie* と *clean*, *kill*, *untie* を取り上げ、両者はほぼ同じ意味を表すが、前者は行為起源の動詞なので使役交替を許さない、しかし後者は許される、と説明した。

本居春庭（1828）は日本語だけの観察を通して、意味的に異なる二つのグループ、すなわち、ミズカラシカスル（S<sub>a</sub> 動詞に相当）とオノズカラシカル（S<sub>p</sub> 動詞に相当）と名づけた二種類の自動詞があることに気づいた（島田1979参照<sup>(14)</sup>）。Sapir (1917) よりほぼ一世紀の前に、Perlmutter (1978) よりは一世紀半も前に、彼らの *active-inactive*、そして、非能格と非対格の区別に相当する自動詞の二分類を行ったのである（Shibatani 2000）。春庭の優れた点は、意味を基準にした分類であったにもかかわらず、使役交替（自他交替）だけでなく、*sase* 使役および受身の成否も同時に予測するものだったことである。このような春庭の考え方は、Shibatani (2000) と Shibatani & Pardeshi (2002) に次のようにまとめられている。

(17)

	他動詞	使役	受身
オノズカラシカル動詞	○	×	×
ミズカラシカスル動詞	×	○	○
他動詞		○	○

Haspelmath と春庭の共通点は、使役交替と動詞の意味の間に強い結びつきがあることを発見したことと、状態変化動詞は使役交替（自他交替）を許し、行為動詞は許さない、という一般化を示したことである。<sup>(15)</sup>

しかし、このような一般化をあたかも厳格な意味基準であるかのように受け止め、これを

基準に強い主張をしたところに問題が生じているように思われる。

この点について、行為動詞が使役交替を許している英語の例から見てみよう。次の例は Levin & Rappaport Hovav (1995 : 80, 111) と 鷲尾 (1997 : 67, 85) から引用した。

- (18) a. The general *marched* the soldiers to the tents.  
 b. The rider *jumped* the horse over the fence.  
 c. We *ran* the mouse through the maze.  
 d. He *walked* the children across the road.  
 e. He *swam* his horse across the river.  
 f. The firemen *stood* us to one side to let the ambulance through.
- (19) a. \*The comedian *laughed* the crowd.  
 (cf. The comedian *made* the crowd *laugh*.)  
 b. \*The teacher *played* the children.  
 (cf. The teacher *made* the children *play*.)

Levin & Rappaport Hovav (1995) によると、英語は (18) のように行為動詞も使役交替を許すことができる。March, jump, run, walk, swim のように移動様態を表す動詞および stand のように「特定の位置への移動」(move to a position) を表す動詞は、<sup>(16)</sup>他動詞用法が可能である。しかし、行為動詞すべてが使役交替を許すのではなく、(18) と (19) の相違からわかるように、明らかな線引きができる。つまり、英語は laugh, play のような行為動詞は他動詞用法を許さず、生産的使役の make を用いて表現するしかないのである。

ここで問題となるのは、この分布をどのように解釈するかである。今二つの見方が提示できる。一つは、非対格仮説に基づく（いわゆる動格型の active-inactive の）見方である。もう一つは、2節で提案した‘意味的能格性’の定義に基づく見方である。前者の見方をとると、移動様態動詞は行為動詞ではあるが、非対格であると見なさなければならない。そうでなければ理論上不都合が生じる。一方、後者の見方をとると、使役交替において英語の自動詞のふるまいは、 $S_p=P$  を共通の意味基盤とし、移動様態を表す行為動詞 ( $S_a$  動詞) までをその中に取り込む方向へと一般化の拡張が起こっている、という自然な説明が用意される。以下では、英語だけでなく韓国語も考慮に入れると、‘意味的能格性’の定義に基づく後者の見方のほうがより説明力があるということを見ていきたい。

Levin & Rappaport Hovav (1995 : 110-112, 187-188) は、英語の移動様態動詞に関して、非対格仮説に基づき、次のような分析を提示した。(20a) のように、方向句を伴わない移動様態動詞は非能格である。しかし、(20b) のように、移動方向を表す解釈のもとでは非

対格である。従って、(18)の文は非対格である(20b)のような動詞の他動詞用法であるとされる。

- (20) a. *The soldier march.* (非能格)  
 b. *The soldiers march to the tent.* (非対格)

なお、この主張の裏付けとして、方向句を伴わない他動詞文は次のように不適格になることを取り上げている。すなわち、(18)は(20a)のような自動詞文の他動詞用法ではないと分析される。

- (21) a. ??*The general marched the soldiers.*  
 b. ?*The rider jumped the horse.*  
 c. \**We ran the mouse.*

この分析は、これだけを見ると一応辻褄が合うように見える。しかし、Goldberg (1995: 16)と高見・久野(2001: 76, 88)が的確に指摘するように、これは彼女ら自身が提示するWay構文の分析とは矛盾する結果となる(例は、高見・久野2001: 76, 88から)。

- (22) a. *Mary danced her way through the park.* (非能格)  
 b. *The kid jumped his way to the sandbox.* (非能格)

つまり、彼女らが提示したWay構文の分析によると、Way構文は意図的な事象であり、従って、この構文に現れる動詞は非能格である。すると、(22)はすべて非能格であると判断される。ところが、先ほどの移動様態動詞の使役交替に関する基準を適用してみると、今度は、Way構文が移動の経路を表す方向句を伴っているため、(22)の*dance, jump*は非対格であると判断されてしまう。

つまり、意図性の意味基準からすると、移動様態動詞は非能格である。しかしそうすると、非能格も使役交替が可能であると言わなければならない。そこで、方向句を義務的に付加するものだけが他動詞用法をもつとすれば、したがって、有界性の事象は非対格だとすれば説明ができるから(そして、状態変化・位置変化も終着点をもつ有界の事象だから、その点で両者が同じカテゴリーだということも言えるから)、説明の妥当性は一応維持できる。すなわち、イベントの完了アスペクト(着点ないし経路を明示的に示すことにより行為の完結性を示すこと。経路はそこを通過すれば行為は一応完結する)が非対格性の意味基準として導

入されたわけである（影山1996：177，影山2000：46-7参照<sup>(17)</sup>）。しかし，その結果，今度は *Way* 構文が説明できなくなる，という混迷の状態に陥ってしまったと言わざるを得ない。

（影山 2000，丸山 2000によると，実は方向句がなくても他動詞用法を許す例もある。（下記の（33）を参照。）よって，完了アスペクトも英語の使役交替を完全には説明できない。）

参考に，*Way* 構文と（18）の文は，一定の移動の距離や経路が解釈されることで共通点をもつことを指摘しておきたい。高見・久野（2001）によれば，*Way* 構文は一定の移動の距離や経路が解釈されるかどうかが重要なので，*The kid jumped his way into the sandbox.* は方向句が付加されているにもかかわらず，不適格とされる。その理由は，この文は一回のジャンプで砂浜に着いた，と理解され，砂浜に辿り着くまでの一定の距離や経路が読み取れないからである。その上，（18）の文は使役者（他動詞の主語）と被使役者（目的語）が共にある目標点に向かって移動する，という随伴使役の状況も必要である（鷺尾 1997，影山 2000，丸山 2000。随伴使役の包括的な記述については Shibatani & Pardeshi 2002参照）。たとえば，（18b）ならば騎手が馬に乗って共に垣根を乗り越えるという状況がある。

このことから見ると，一定の移動の距離や経路が解釈されるかどうかという意味要素は，行為動詞が他動詞用法を持つための必要条件である（しかし，十分条件ではない）と考えることができる。この点は，日本語においても‘母親が子供達を二階に上げた。’という例が適格であることや，‘\*子供を挨拶に回した。’（青木 1977）は不適格であるが，‘赤星をファストに，金本はセカンドにそれぞれ回した。’というローテーションの解釈が出る文脈にすれば適格となることを見ると（この場合，被使役者は行為者として解釈される），移動方向動詞まで可能なので，日本語も同様であると考えられる（詳細は鄭（近刊）を参照）。

以上から，英語の動詞パラダイムは次のように理解できる。使役交替の範囲，すなわち，自動詞の主語が他動詞の目的語と対応する動詞の範疇は，状態変化動詞から出発して，行為動詞まで拡張する。しかし，行為動詞すべてが許されるわけではなく，その中の移動様態動詞だけが他動詞文（語彙的使役文）を許容し，*laugh*, *play*, *cry* のような行為動詞は許容できない。このような分布を非対格か非能格か，という二項対立的な考え方から捉えることには無理がある。

しかし，非対格性の概念から離れて連続的な見方をとれば，次に示される韓国語のパラダイムも無理なく捉えることができる（Shibatani & Pardeshi 2002）。韓国語は，英語では受け入れられなかった *laugh*, *play*, *cry* のような行為動詞までも受け入れることができるからである。つまり，英語の延長線上に位置づけることができるのである。ただし，韓国語は英語と異なり，語彙的（または，形態的）使役形式として知られている接辞 *-i*, *-hi*, *-li*, *-ki*（および，*-wu*, *-kwu*, *-chwu*）が付加される。

韓国語	基本形	派生形 (他動詞・使役)
(23) 状態変化動詞 (S <sub>p</sub> 動詞)		
a.	<i>nokta</i> (溶ける)	<i>nok-i-ta</i> (溶かす)
b.	<i>maluta</i> (乾く)	<i>mal-li-ta</i> (乾かす)
c.	<i>kkulta</i> (沸く)	<i>kkul-i-ta</i> (沸かす)
d.	<i>cwukta</i> (死ぬ)	<i>cwuk-i-ta</i> (殺す)
e.	<i>tolta</i> (回る)	<i>tol-li-ta</i> (回す)
(24) 行為動詞 (S <sub>a</sub> 動詞)		
a.	<i>ketta</i> (歩く)	<i>kel-li-ta</i> (歩かせる)
b.	<i>seta</i> (止まる, 立つ)	<i>se-ywu-ta</i> (止める, 立たせる)
c.	<i>wusta</i> (笑う)	<i>wus-ki-ta</i> (笑わせる)
d.	<i>wulta</i> (泣く)	<i>wul-li-ta</i> (泣かせる)
e.	<i>nolta</i> (遊ぶ)	<i>nol-li-ta</i> (遊ばせる)
(25) 他動詞		
a.	<i>yelta</i> (開ける)	* <i>yel-li-ta</i> (開けさせる)
b.	<i>chata</i> (蹴る)	* <i>cha-i-ta</i> (蹴らせる)
c.	<i>palpta</i> (踏む)	* <i>palp-hi-ta</i> (踏ませる)
d.	<i>kkayta</i> (割る)	* <i>kkay-i-ta</i> (割らせる)
e.	<i>chita</i> (打つ)	* <i>chi-i-ta</i> (打たせる)

上記のデータを見ると、接辞 *-i*, *-hi*, *-li*, *-ki* は (23) の状態変化動詞から (24) の行為動詞までを同一に取り扱っており、(25) のような他動詞には制約がある。<sup>(18)</sup> これを S<sub>p</sub>/S<sub>a</sub> 両用接辞と呼ぼう。すると、この接辞は2節の(4)の定義に従い、‘意味的能格型システム’の接辞と考えることができよう。つまり、この接辞は状態変化動詞を基盤にして、そこに行為動詞を部分的に受け入れることはできるが、その逆の、行為動詞全体を基盤にして、そこに状態変化動詞を部分的に受け入れる、という‘意味的対格型システム’の接辞ではないことがわかる。

すると、英語と韓国語の共通点および相違点は次のように示すことができる。<sup>(19)</sup>

(26)

	状態変化	移動様態	行為
使役交替	<i>melt</i>	<i>walk</i>	<i>laugh, play</i>
英語	自他両用動詞		
韓国語	接辞 <i>-i/-hi/-li/-ki</i> (Sp/Sa 両用接辞)		

ここで、次の二点を確認しておきたい。一つは、(24)の派生形動詞は(23)と同じ接辞を用いるという形態的な共通点だけでなく、文構造の作り方も同じように他動詞構造である、という点である。

(27)と(28)を見られたいが、(28c)の *ai-tul* ‘子供達’も(27c)の *soy* ‘鉄’と同じように、目的語を与格に入れ替えることはできない。少なくとも(28c)は(28b)と比べると、不自然であることは確かである。(この点は日本語と異なるので注意されたい。日本語は‘子供達を笑わせた’も‘子供達に笑わせた’もOK。)つまり、もし被使役者の子供達が文構造からも行為者として認められているならば、与格交替が許されないはずはないと考えられる。しかし、(28c)は不可能であるが、(29)のように生産的使役形式 *-key hata* に入れ替えると、与格も完全に受け入れることができる。このことから(24)の派生形動詞は、他動詞構造を用いる、従って、被使役者を与格に標示することには制約がかかる、と考えることができるのである。

(27) a. *soy-ka nok-ass-ta.*

鉄-主格 溶ける-過去-断定

‘鉄が溶けた。’

b. *ai-tul-i soy-lul nok-i-ess-ta.*

子供-複数-主格 鉄-対格 溶ける-*i*-過去-断定

‘子供達が鉄を溶かした。’

c. \**ai-tul-i soy-eykey nok-i-ess-ta.*

子供-複数-主格 鉄-与格 溶ける-*i*-過去-断定

‘子供達が鉄に溶かした。’

(28) a. *ai-tul-i wus-ess-ta.*

子供-複数-主格 笑う-過去-断定

‘子供達が笑った。’

b. *sensayngnim-i ai-tul-ul wus-ki-ess-ta.*

先生. 尊敬-主格 子供-複数-対格 笑う-*i*-過去-断定

‘先生が子供達を笑わせた。’

c. ??sensayngnim-i ai-tul-eykey wus-ki-ess-ta.

先生. 尊敬-主格 子供-複数-与格 笑う-i-過去-断定

‘先生が子供達に笑わせた。’

(29) sensayngnim-i ai-tul-eykey wus-key ha-yess-ta.

先生. 尊敬-主格 子供-複数-与格 笑う-使役-過去-断定

‘先生が子供達に笑わせた。’

もう一つは、(24) の派生形動詞は、英語と同様に随伴使役の状況を表すことができる、という点である。

(30) a. sensayngnim-i haksayng-tul-ul yek-kkaci kel-li-ess-ta.

先生. 尊敬-主格 学生-複数-対格 駅-まで 歩く-i-過去-断定

‘先生が学生達を駅まで歩かせた。’

b. sewul-lo mal-ul talli-ess-ta.

ソウル-へ 馬-対格 走る-過去-断定

‘ソウルに向かって馬を走らせた。’

c. kyengchal-i tallie-onun haksayng-tul-ul ke cali-ey

警察-主格 走ってくる 学生-複数-対格 その場-所格

se-ywu-ess-ta.

止まる-i-過去-断定

‘警察が走ってくる学生達をその場に立ち止めた。’

上の例を英語の (18) と比較されたい。(30) は (18) と同じように移動方向を表す句が付加されている。さらに、(30a) は学生だけが駅まで歩いて行ったのではなく、先生も (実際に歩いたかどうかは別として) 学生を駅まで引率して行った状況であることを表す。もし先生が職員室などに残っていて、学生だけを駅まで歩かせた状況であれば、この文は生産的使役-key hata を用いた表現に直さなければならない。次に、(30b) の tallita ‘走る’ は自他両用動詞である。<sup>(20)</sup> これも (18b) の状況と同様に、馬に乗って (馬と一体となって)、ソウルに向かって馬を走らせたことを表す。(この場合、ソウルに到着したかどうかは含意しない。) (30c) も英語の (18f) と同様の状況である。

ところが、韓国語では英語のように必ず移動方向を表す句が要求されるのではない。(上述したように、実は英語も方向句が義務的でない例がある。) 次のように——特に (31a)

を下記の (33) と比較されたいが——方向句が付加されなくても、また、完了アスペクトでなく継続運動であっても、適格な文を作ることができる。しかしここでも、意味的には随伴使役の（あるいはそこから拡張した）状況が読み取れる。すなわち、(31a) では主語が子供に（一緒に歩いたかどうかは別として）一時間ずっと付き添っていた状況であることを表す。また、(31b) は学生達が一時間ずっと笑い、それと共に先生の面白話も一時間ずっと続いた状況であることを表す。(31c) は先生が学生達を一日中ほったらかして勉強させなかったこと（一日ずっと関与すべきところをしなかったこと）、それで学生が一日中遊んだ結果となったことを表す。つまり、韓国語は *walk* のような移動様態動詞と *play*, *laugh* のような行為動詞が、同じ形態および文構造を用いるだけでなく、使役意味においても連続している、ということである。<sup>(21)</sup>

(31) a. kongwuen-eyse ai-lul      hansikan-tongan kel-li-ess-ta.

公園-で          子供-対格 一時間-間          歩く-i-過去-断定

‘公園で子供を一時間歩かせた。’（歩行練習のため）

b. sensayngnim-i      caymiissnun iyaki-lo      ai-tul-ul

先生-尊敬-主格 面白い          話-道具 子供-複数-対格

*hansikan-naynay wus-ki-ess-ta.*

一時間-ずっと      笑う-i-過去-断定

‘先生が面白いお話で子供達を一時間ずっと笑わせた。’

c. sensayng-nim-i      haksayng-tul-ul      halwucongil

先生-尊敬-主格 学生-複数-対格      一日中

*nol-li-ess-ta.*

遊ぶ-i-過去-断定

‘先生が学生達を一日中遊ばせた。’

以上述べたことをまとめると、使役交替に参加できる動詞は、典型的には状態変化動詞である。Haspelmath の一般化を参考にすると、おそらくほとんどすべての言語において状態変化動詞は使役交替を許容する。しかし、行為動詞も使役交替が不可能ではないことが英語の例からわかる。ここで、もし行為動詞が使役交替を許す言語があれば、まずは移動方向動詞・移動様態動詞をその中に含む可能性が高いという予測ができる。そこからさらに、アスペクトの制約をなくし、継続運動も受け入れることになると、今度はその他の行為動詞まで含む方向へと一般化の拡張をみせることも不可能ではない。そのような言語として、韓国語がある。<sup>(22)</sup> この場合は使役状況（主に随伴使役である）に制約がかかっていることも上の観

察からわかる。これを (32a) のように整理すると、Haspelmath の一般化は (32b) のように修正する必要がある。

(32) 拡張の一般化と制約 (II) : 使役交替の場合<sup>(23)</sup>

- a. 使役交替は、 $S_p=P$  を共通の意味基盤とし、そこに  $S_a$  動詞を受け入れる方向へと一般化の拡張をみせる。
- b. ほとんどすべての言語において  $S_p$  動詞を排除し、その上に  $S_a$  動詞を基盤に使役交替 (自他交替) を許すことはできないか、非常に困難である。

以上から、使役交替において、英語のパラダイムおよび韓国語の接辞 *-i*, *-hi*, *-li*, *-ki* のパラダイムは、自動詞が非能格か非対格かという二分類では片付かない。従って、非対格性よりも本稿で定義・提案した‘意味的能格性’の方がより説得力があると主張できる。

最後に、英語においても必ずしも着点あるいは完了性を持たなくてもよい例を挙げておこう。(33) は影山 (1996 : 177, 2000 : 47) と丸山 (2000 : 224) から引用した。影山 (2000 : 54) では、(33) が非能格か非対格かには特に触れず、次のように説明している。これらの例は、歩行を介添えするという意味になるので、たとえば、(33b) ならば、病人が歩くという行為さえ達成されれば十分であり、歩いてどこまで行くという目標は特に関与しない (これも韓国語の (31a) と比較されたい)。その結果、着点は必ずしも現れず、従って、完了アスペクトも不必要であるという。いずれにしろ、なぜこれらの動詞が他動詞用法をもつかについては、上記の韓国語の例も含め、統一的な説明が要求されるであろう。ここでは、その解決策として、連続的な捉え方ができる‘意味的能格性’という用語を提案したのである。

- (33) a. John walked his dog for hours.  
 b. He walked a sick man.  
 c. I'll walk you a little ways, he said. We started walking.

## 6. 分裂主語システム

非対格仮説をサポートする上で、もっとも強力な根拠を提供したのものとして動格言語の分裂主語システムの状況がある。バツビ語の例を取り上げ (Comrie 1978, DeLancey 1981), その状況を確認しよう。

(34) バツビ語

- a. Txo      naizdrax      qitra.

## we-ABS to-the-ground fell

'We fell to the ground (unintentionally, not our fault).

## b. A-txo naizdrax qitra.

## ERG-we to-the-ground fell

'We fell to the ground (intentionally, through our own carelessness).

(34) は両者とも自動詞文であるが、この言語では自動詞の主語 S を表す格標示が同じではない。すなわち、自動詞の唯一の名詞句 (*we*) が、他動詞の P と同じ格 (ABS と表示されている) をとる場合 (34a) と、他動詞の A と同じ格 (ERG と表示されている) をとる場合 (34b) の二種類に分裂する。(ただし、上記のグロスでは、能格言語の記述用語である能格 (ERG) ・絶対格 (ABS) が用いられているため、誤解を招くかもしれない。以下では、動格言語の格標示システムを記述する場合は、行為者格 (Agentive case) ・非行為者格 (Patientive case) という用語を用いたい。) 意味的には、非行為者格をとる (34a) は非意図的な事象に対応するのにたいして、行為者格をとる (34b) は意図的な事象に対応する。<sup>(24)</sup>

つまり、これらの言語では自動詞主語の格標示を変える —— すなわち、分裂主語システムをとる —— という方略により、自動詞が二つのグループに分類でき —— すなわち、分裂自動詞 (S<sub>a</sub> 動詞と S<sub>p</sub> 動詞) となり ——、この区別に意図性の意味基準が関与する、というパターンを示すのである。このような状況から見れば、非対格仮説が動詞の意味と文法関係の対応を捉えようとして (7) のような形式化を提案したことは、一応は理解できる。

しかし、分裂主語システムの多くが概ねバツビ語のように意図性が重要な概念であり、従って、非対格仮説を支持するにしても (Harris 1982), すべてが同じような意味基準により分裂されるとは思えない状況がさまざまな研究から報告されている。とりあえず Merlan (1985: 325) によれば、言語によって S<sub>a</sub> クラスと S<sub>p</sub> クラス (彼女の用語では, subjective class と objective class) のサイズが異なる。たとえば、ダコタ語 (Dakota) やグルジア語 (Goergian) などは、S<sub>p</sub> クラスが S<sub>a</sub> クラスよりサイズが大きい。一方、東ポモ語 (Eastern Pomo) やバツビ語 (Batsbi) などは、S<sub>p</sub> クラスより S<sub>a</sub> クラスのほうがサイズが大きい。また、Mithun (1991) によれば、言語によって異なる —— しかし、決してランダムではない —— 多様な意味基盤があり、従って、格標示選択に関与する意味的動機付けも一律でないことが指摘されている。(その他、DeLancey 1981, 1985, Rosen 1984, Van Valin 1990, Zaenen 1993, 鷲尾 2002なども参照。<sup>(25)</sup>)

すなわち、分裂主語システムの状況においても、意味と文法関係の結びつきが非対格仮説で言われるように普遍的一配列を示さない (下記の (35-37) を参照)。とりわけ、Mithun

(1991 : 516, 520) によると, 中央ポモ語 (Central Pomo) には Perlmutter が提示した非対格性の意味基準 ((11-12) 参照) と逆の状況が見られる。そこでは *cough, sneeze, hiccough* のように生理現象を表す動詞が非行為者格をとる。その一方で, 'I am fat.', 'I am old.' のような状態述語は行為者格をとる。それにたいして, ラコタ語 (Perlmutter が非対格仮説を提案するさいに取り上げたダコタ語の方言。Harris 1982 : 291.) のように, 非対格性の意味基準とほぼ一致する言語もある。ラコタ語は中央ポモ語とは反対に, *cough, sneeze, hiccough* の生理現象が *walk, play* の意志動詞とともに, 行為者格をとるのである。

このように言語ごとに異なる状況を Mithun (1991 : 524) に基づき, 次のようにまとめてみよう。(イベント event と状態 state の分類は Mithun に従う。ただし, event 1, 2, 3 と state 1, 2, 3 の数字は筆者による。P:performance, E:effect, I:instigation。便宜上, 原語表記は省略。)

(35) グアラニ語 (Guarani)

a. 行為者格をとる動詞

event 1 : [+event] [+P/E/I] [+control]

jump, go, run, get up, walk, come, swim, arrive, pass, descend,  
get off,

play, dance, smoke, work, fly, turn, dance, smoke, work, etc.

(p.512)

event 2 : [+event] [+P/E/I] [-control]

hiccough, sneeze, vomit, etc.

event 3 : [+event] [-P/E/I] [-control]

fall, die, slip, etc.

event (その他) : sink, sleep, stagger, get lost, get stuck, wake up, split

(crack, burst), come loose (loose one's jop), go out (die away), etc.

(p.513)

b. 非行為者格をとる動詞

state 1 : [-event] [-P/E/I] [-control] [+affect]

be sick, be tired, be cold, etc.

state 2 : [-event] [-P/E/I] [-control] [-affect]

be tall, be strong, be righthanded, etc.

state 3 : [-event] [-P/E/I] [-control]

reside, be prudent, be patient, etc.

state(その他) : be sleepy, be hungry, be stingy, be tender (unripe), be wet (soaked, moist), be weak, be hot (warm), be dead (deceased), be smooth, be fast (quick, lightfooted), be wise, be lazy, be gray-haired, be curled (waved hair), etc. (p.513)

(36) ラコタ語 (Lakota)

a. 行為者格をとる動詞

event 1 : [+event] [+P/E/I] [+control]

jump, come, walk, stand up, dance, play, arrive, crawl, sing, speak, fight, dig, eat, swim, etc. (p.515)

event 2 : [+event] [+P/E/I] [-control]

hicough, sneeze, vomit, yawn, cough, snore, cry (weep), grunt (sob), shiver, dream, smile, stutter (stammer), miss my aim (fail), misspeak, scab, etc. (p.516)

state 3 : [-event] [-P/E/I] [-control]

reside, be prudent, be patient, etc.

state (その他) : live (dwell), jealous, willing, hiding, lying, etc. (p.515)

b. 非動作主格をとる動詞

state 1 : [-event] [-P/E/I] [-control] [+affect]

be sick, be tired, be cold, be sleepy, etc.

state 2 : [-event] [-P/E/I] [-control] [-affect]

be tall, be strong, be righthanded, etc.

event 3 : [+event] [-P/E/I] [-control]

fall, die, slip, etc.

event (その他) : grew up, stagger, get well, give out, blow up in anger, etc.

(p.515)

state (その他) : be full, tired, mad, in pain, happy, good, bad, slow, (I'm)

Sioux, etc. (p.515)

(37) 中央ポモ語 (Central Pomo)

a. 行為者格をとる動詞

event 1 : [+event] [+P/E/I] [+control]

jump, go, run, stand up, fight, get up, turn, swim, play, crawl, arrive, escape, talk, etc. (p.518)

state 3 : [-event] [-P/E/I] [-control]

reside, be prudent, be patient, etc.

state 2 : [-event] [-P/E/I] [-control] [-affect]

be tall, be strong, be righthanded, etc.

state (その他) : be good, ugly, ei (I'm) Indian, (I'm) mean, beautiful, alive, blind, deaf, be old, be fat, live (here), be home, be (still) standing, be hiding, be lying down, be careful, be lazy, be kindhearted, be conceited, etc. (p.519, 521)

b. 非行為者格をとる動詞

state 1 : [-event] [-P/E/I] [-control] [+affect]

be sick, be tired, be cold, etc.

event 3 : [+event] [-P/E/I] [-control]

fall, die, slip, etc.

event 2 : [+event] [+P/E/I] [-control]

hiccup, sneeze, vomit, yawn, choke, stagger, tremble, blush, burp, miss, shiver, sweat, etc. (p.520)

state (その他) : full (from overeating), feel sleepy, scare, in pain, sad (lonesome), weak, surprise, ticklish, have a blister (on my hand), etc. (p.518-9)

event (その他) : faint, trip, stumble, drown, get angry, get lost, get well, get lost, remember, forget, recover, etc. (p.519)

以上からわかることは、言語により分裂の様相が異なっており、従って、意味と文法関係の対応もそれぞれ異なる、ということであろう。Mithun (1991) によれば、グアラニ語はイベントかイベントでないか、すなわち、active-stative という語彙アスペクトを基準に行為者格か非行為者格かが決まる (p.524)。しなしながら、ラコタ語と中央ポモ語の状況はその通りではない。先ほども述べたように、この二つの言語が表している最も対照的な状況を整理してみると、次のようである。

(38) a. 恒常的状态・属性 (inherent state) を表す述語

[state 2] : tall, strong, good, (I'm) Indian, blind, etc.

(i) 行為者格をとる : 中央ポモ語

(ii) 非行為者格をとる : ラコタ語, (グアラニ語)

b. 生理現象

[event 2] : hiccough, sneeze, vomint, etc.

(i) 行為者格をとる：ラコタ語, (グアラニ語)

(ii) 非行為者格をとる：中央ポモ語

## 7. パラメータの提案

(38) をみると、言語による異なる論理、異なる動機付けがあることを認めざるを得ないだろう。この点に関して、Mithun は言語による意味基盤の多様性を認め、ラコタ語は行為者性 (agency) に基づいているが、中央ポモ語はコントロール性と意味ある影響性 (significant affectedness) の相互作用に基づいていると説明する。ここでは、Mithun の解釈を一部修正・発展させ、(38) のように矛盾する状況を統一的に説明できるパラメータを提案したい。

Mithun によれば、生理現象はコントロールなしに遂行されるイベント (performed by uncontrolled events ; [+event][+P/E/I][-control]) である。(コントロールについて本稿の考え方は Mithun と異なる。下で述べる。) すると、ラコタ語は [-control] は関与せず、[+P/E/I] が行為者性を与えるから行為者格が対応し、他方の中央ポモ語は、行為者性を与える [+P/E/I] でなく、[-control] のために非行為者格が対応する、ということになる。それに、中央ポモ語は影響性にも敏感である。state 1 と state 2 は両方とも状態述語であるが、この言語では state 1 は [+affect] だから非行為者格が対応し、他方の state 2 は [-affect] だから行為者格が対応する。つまり、state 1 と state 2 は両方とも [-control] であるが、ここではコントロールは無関係で、影響性のみかわる、という説明である。

しかし、このような説明からだ、格標示選択には多様な (しかし、ランダムでなくある程度有意義な) 意味基盤と動機付けがある、ということを手帳しただけで、なぜ中央ポモ語にはコントロールと影響性が重要な概念であり、ラコタ語は行為者性が重要なのか。また、その全体のメカニズムはどうなっているのかわからない。しかも、なぜ中央ポモ語は生理現象にはコントロールが関与的で、他方の state 1 と state 2 の区別には無関係なのかも説明できない。さらには、state 2 のように、属性述語についてはラコタ語と中央ポモ語が共に、[-event][-P/E/I][-control][-affect] があるが、なぜ一方は行為者格を取るのに、もう一方は非行為者格を取るのかも説明できない。

本稿では、中央ポモ語に関与的な二つの意味要素——コントロール性と影響性——は、実は、外的要因 (external cause) の関与有無を基準にすると、一つにまとめあげることができる。すなわち、当該の事象を自分がコントロールしているか (行為者性)、それとも、他の要因によってコントロールされ、その影響を受けているか (非行為者性)、という基準である。ここで、とりあえず、言語には世界に対する異なる見方・異なる論理があ

ることを認め、次のようなパラメータを提案する。以下では、このパラメータによると、(38)の矛盾がうまく解決できることを説明する。

(38)のような状況の背後には、話者が事態生起の由来をどこに求めるのか、という点において、(39)のように、出発点を異にする二つの見方があると仮定する。これを‘事態生起の由来にたいする話者の見方パラメータ’（以下、見方パラメータ）と呼ぼう。

(39) 事態生起の由来にたいする話者の見方パラメータ

- a. 事態生起の由来を、行為者性 (agency) の関与の有無に求める。すなわち、行為者性基準の見方をとる：ラコタ語（行為者性見方パラメータ）
- b. 事態生起の由来を、外的要因 (external cause) の関与の有無に求める。すなわち、非行為者性基準の見方をとる：中央ポモ語（非行為者性見方パラメータ）

このパラメータがどのように格標示選択とかかわるかを説明する前に、まず、次の点を確認しておきたい。(35-37)のデータをみるとわかるが、一見複雑に見える上記の三つの言語にも、実は、次の点においては共通の意味基盤があることが指摘できる。

- (40) a. 意志的な行為を表す動詞は必ず行為者格をとる：[event 1]
- b. *sick, tired, cold* のように、外からの刺激 [+affect] により一時的にある状態を帯びる場合は必ず非行為者格をとる：[state 1]

さらに、(40b)と関連して、中央ポモ語には、次のような対立もある (Mithun 1991: 519, 521)。下の(41)の恒常的状态・属性が行為者格をとるのにたいして、(42)のように状態変化 (inchoative) になると、非行為者格をとる。つまり、中央ポモ語の格標示選択には、(ア) 状態か状態変化か ((41) と (42) の対立)、(イ) 恒常的状态か一時的状態か ((41) と (40b) の対立) が有意義な概念として関与するのである。

(41) 行為者格をとる：中央ポモ語

- a. I'm old.
- b. I'm fat.
- c. I'm Indian.
- d. I'm kindhearted.

(42) 非行為者格をとる：中央ポモ語

- a. I have gotten old.
- b. I have gotten tall.
- c. I'm getting well.
- d. I feel sleepy.

では、上記のパラメータがどのように、両言語の格標示選択にかかわるかを説明しよう。ラコタ語のように、事態生起の由来を行為者性の関与の有無に求める言語は、行為者性に敏感に反応するので、(40a)の典型的な状況を基盤に行為者格が優先的に対応する。これを話者の行為者性基準の見方による‘行為者格優先’であるとしよう。このような言語では行為者性が見られなければデフォルトして非行為者格が与えられる。この場合、行為者性を認定するものは、意志性とコントロール性の相互作用である、と考える。この点は Mithun と異なるので、少し詳しく述べたい。

すなわち、行為者性は典型的には人間がその中心にあるように、意志性を基盤に与えられる。しかし、意志性がなくても、コントロール性を基盤に行為者性を認めることもできる。たとえば、

- (43) a. うっかりコーヒーを溢してしまった。
- b. 冷蔵庫のドアを開けた瞬間、うっかり卵を割ってしまった。

などの非意図的な事象には、意図性・意志性は関与しない。しかし、不注意から起こった事象という解釈からわかるように、当該事象に対するコントロール性を問うことはできる。

(これはしばしば‘責任’とも呼ばれている。Pardeshi 2002参照。)意志性とコントロール性をこのように分離して考える必要があるのは、肯定命令と否定命令の相違からもわかる。

- (44) a. \*うっかりコーヒーを溢せ!
- b. \*冷蔵庫を開けるとき、うっかり卵を割れ!

(44)は不自然だが、それは肯定命令が行為の遂行を命令することだから、‘うっかり’と意味的に矛盾する、すなわち、行為遂行のさいの意志性にかかるからである。<sup>(26)</sup>しかし、

- (45) a. うっかりコーヒーを溢さないでください!
- b. うっかり卵を割らないでください!

のように、否定命令になると自然である。それは、否定命令は意志性にかかるのではなく（行為遂行を命令しないから）、コントロール性にかかるため、‘うっかり’と意味的に矛盾しなくなるからだとすれば、うまく説明できる。すなわち、意志性がない場合でもコントロール性を促す（注意を促す）ことはできる<sup>27</sup>。他にも、言い間違いや量り間違いのような例もある。何かを言う・量ることには、意志性がなければ行為そのものを遂行できないはずだが、何かを間違えることには、意志性でなくコントロール性のみ関与するであろう。不注意とは、このように意志性が関与せずに、コントロール性のみ作用する場合に生じる意味である。従って、この場合のコントロール性は、意志性と一応切り離された概念として捉えることができる。

すると、この二つの相互作用は次のようであろう。意志性が優勢の場合、コントロール性は意志性の背後に隠れていて、普通表に表出されない（認識されない）。しかし、意志性がなくなれば、また、それにもかかわらず当該事象が遂行されることになれば、そこにコントロール性が顔を出して現れる（認識される）。これまで往々潜在能力（potent）や内在的コントロール（cf. 影山 1996）と呼ばれてきたものは、このようなコントロールの概念であろう。

コントロールをこのように定義すると、ラコタ語の生理現象がなぜ行為者格をとるかについては、次のように説明できる。行為者性の下位概念として（意志性は持たないが）コントロール性があるからである。（Mithun はこれを [-control] としたことに注意！）すなわち、ここでは Mithun の行為者性の概念を [+volition][+control] と [-volition][+control] に下位分類する。すると、生理現象が行為者格を選択する理由として [-volition][+control] が与えられる。

これを上記の見方パラメータに基づいて説明すると、次のようになる。行為者性基準の見方をとる言語は、意志的な行為を基盤にして、さらに、生理現象の現われも自分に帰属する行為として見なすことが可能になる。それは意志的な行為同様（実際は意志性がないが）、自分自身がそれを引き起こしていると思なされるから（すなわち、コントロール性があるから）、行為者格をとる、ということになる。では、恒常的な状態・属性はなぜ行為者格をとらないかという、それはこれらの事象が行為者性とは無関係だから、と説明すればよい。つまり、行為者性基準の見方に立つから非行為者格をとるのである。

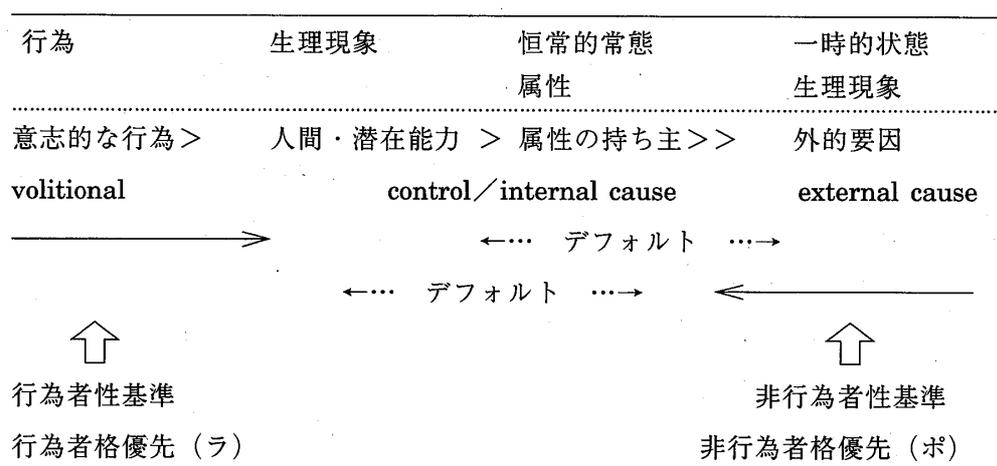
一方、中央ポモ語のように、事態生起の由来を外的要因の関与有無に求める言語は、外的要因があるかないかに敏感に反応するので、(40b) の典型的な状況を基盤にして、非行為者格が優先的に対応する。これを非行為者性基準の見方による‘非行為者格優先’であるとしよう。このような言語では外的要因が見られなければ、デフォルトして行為者格が与えられる。では、この言語ではなぜ恒常的な状態・属性が行為者格をとるかという、それは外的

要因による事象でないから非行為者格は与えられない、という消極的な理由からだと言明できる。具体的にいうと、当該事象に外的要因の関与が見られなければ、その現われ（恒常的状态・属性）は自分に帰属するもの、すなわち、内在的属性ないし内在的要因（cf. Levin & Lappaport Hovav 1995 : 91）によるものと見なされるから——すなわち、external causeでなく internal cause だから——行為者格をとる、ということである。すると、なぜこの言語では生理現象が非行為者格をとるかということ、これも行為者性基準の見方でないからと説明すればよい。すなわち、非行為者基準の見方に立つと、生理現象を自分のコントロールの外にある要因に誘発され引き起こされた事象だと見なすことができるからである。さらに、(40b) の一時的状態と同様だという見方も可能だからであろう。

一般に生理現象には経験者 (experiencer) の意味役割が当てられ、統語的には外項 (主語) をとるとする見方がある (影山 1996 : 82, 88参照)。これは、ラコタ語のように、行為者性基準の見方をとる言語、すなわち、意志性を出発点にしてコントロールまたは内在的コントロールまで行為者格が与えられる言語には有効かもしれない。しかし、中央ポモ語のように、非行為者性基準の見方をとり、外的要因の関与の有無に敏感な言語では、外項 (行為者格) ではなく、むしろ内項 (非行為者格) に結びつくことになるので、そのとおりでないことが判明する。

以上、述べたことをまとめてみよう。本節で提案した見方パラメータを受け入れると、(38) の矛盾は (46) のように統一的に捉えることができる。

(46) 見方パラメータと格標示選択のシステム



以上によると、動格言語の格標示システムも一律に決まるものでなく、二つの異なる意味基盤があることを認めることになる。このような意味基盤の相違を、ここでは事態生起の由

来にたいする話者の見方パラメータを設けて、行為者性見方パラメータと非行為者性見方パラメータがあると説明した。

この二つの見方パラメータを受け入れると、これまでしばしば指摘されてきた言語間のずれ（いわゆる mismatches）およびサイズの相違は、次のように説明できる。まず、ラコタ語と中央ポモ語のように、根源的な相違が見られると、それは見方パラメータの設定が異なると捉えられる。次に、見方パラメータは同じであっても、言語による一般化への拡張の段階や方向が異なる可能性も考えられる。ラコタ語とグアラニ語がそのような例である。(38)にまとめているように、event 1 と event 2, state 1 と state 2 の状況までは、両言語は一致する。すると、両言語の見方パラメータは同じだと想定できる。しかし、細かい違いがあり、そこから先の部分は異なっている。(35-37)にあげた event 3 (*fall, die, slip*) と state 3 (*reside, be prudent, be patient*) は正反対の状況を見せる。グアラニ語では event 3 に行為者格が対応し、他方の state 3 には非行為者格が対応するが、ラコタ語はその逆である。Mithun によれば、グアラニ語はイベント性の有無が基準であり、ラコタ語は行為者性が基準である。我々の捉え方からすれば、両言語の見方パラメータは同じで、両者とも行為者性基準である。しかし、そこから一般化への拡張の段階、もしくは（行為者性を構成する要素の中からより重要とされる側面が言語によって異なってくる可能性があり——たとえば、行為の表面的な動きか、内的な力かのように——、おそらくその選択の相違からくる）方向の相違であろうと説明することができる。従って、見方パラメータによれば、このような状況もうまく扱うことができる。

また、このパラメータを受け入れると、次のようなことも予想できる。すなわち、理論的には（実際は言語ごとに拡張の段階が異なる可能性もあるので一律ではないだろうが）、行為者性基準の見方をとる言語は、非行為者格（デフォルト格）のサイズが大きい可能性が高く、一方、非行為者性基準の見方をとる言語は、その反対に、行為者格（デフォルト格）のサイズが大きい可能性が高い。言い換えれば、有標のサイズが小さいという論理である。

(Merlan 1985: 325が、ダコタ語は  $S_p$  クラスのサイズが大きく、東ポモ語は  $S_a$  クラスのサイズが大きい、といった上記の説明も参照されたい。) このような予想可能性からみても、見方パラメータの提案は有効である。

## 8. 結論

本稿の目的は、分裂自動詞性の本質を追究することであった。そのためには、非対格仮説の経験的基盤を検討する、という方略をとってきた。その結果は以下の通りである。

1. 非人称受身や迷惑受身も含めた、受身は、行為動詞 ( $S_a=A$ ) を基盤にして、状態変

化変化動詞 ( $S_p$  動詞) も受け入れる方向へと一般化する傾向が認められる。

2. 使役交替は、状態変化動詞 ( $S_p=P$ ) を基盤にして、行為動詞 ( $S_a$  動詞) を受け入れる方向へと一般化する傾向が認められる。
3. 動格言語の分裂主語システムは、少なくとも二つの異なる意味基準が認められる。

このような結果から、次のような提案および主張をした。

4. 自動詞のふるまいは、非対格仮説の主張のように二項対立のものではない。不均質性も受け入れ、連続的であり、言語によってサイズの大きさも異なる。本稿では、このような状況を捉えるために、自動詞システムにおける、‘意味的対格型システム’ (Semantic Nominative-accusative system), ‘意味的能格型システム’ (Semantic Ergative-absolutive system) という用語を提案した。これは、言語類型論における格標示システムとパラレルな関係として厳密に定義され、導入された。
5. 上記の3については、Mithun (1991) の解釈を一部修正・発展させて、‘事態生起の由来にたいする話者の見方パラメータ’ (略して、‘見方パラメータ’) を提案して説明した。これによると、動格言語においても非対格仮説が想定するような理想的な動格パターン (active-inactive pattern) は、実際には見つかりにくく、しかも、見方パラメータが異なる言語が存在するので、非対格仮説の普遍的な一配列仮説は普遍的でないと主張した。

最後に、非対格仮説の理論的な問題点は多岐にわたっているので、全部を一つの論文に纏めるのは大変困難な作業であることを認めざるを得ない。今後、韓国語や日本語の資料を綿密に調べて、理論的問題点の一つ一つを論じていくよう努力する必要があるように思われる。

\*<謝辞>まず、本稿を丁寧に読んでいただき、方向性および議論の展開について有益なコメントをくださり、今後の課題についてもご指摘くださった、ライス大学の柴谷方良教授に感謝申し上げます。また、真っ先に草稿を読んでくださり、さまざまな質問をしてくださった金沢大学の中村芳久教授、そして、日本語の表現を含めた有益なコメントを下さった美作大学の桐生和幸氏にもこの紙面を借りて感謝のお言葉を申し上げます。

#### 註

- (1) Perlmutter の普遍的な一配列仮説の問題点については、すでに Rosen (1984) なども論じている。Rosen は普遍的な一配列がないから、非対格性は統語的なものと結論しているが、この立

場には問題がないわけではない。本稿では、統語の問題より意味の問題により深く立ち入る。

- (2) Pullum (1988 : 582) によれば、非対格・非能格という用語は Pullum 自身が提案し、当該の自動詞の(表層上の)主語が他動詞の目的語でないという意味で非対格 (unaccusative) が、他動詞の主語でないという意味で非能格 (unergative) がそれぞれ与えられたようである。
- (3) *open*, *break* のような動詞に‘能格’という用語を当てたのは、Lyons (1968) が先であろう。この場合は、他動詞の目的語と自動詞の主語の統語的な対応、すなわち、使役交替の関係を捉えるものとして採用された (cf. Fillmore 1968)。しかし、Comrie (1978), Dixon (1979, 1994) には、Lyons のこのような用語法に対する辛辣な批判がある。また、生成文法学者の中には、*break* のように自他両用動詞 (意味的には状態変化を表す) のみを能格動詞と呼び、それを除き、意味的に出現・発生・存在を表す自動詞は非対格であるとする立場もある (影山 1994, 1996 : 140)。
- (4) 以前、Comrie (1978) は Lyons (1968) の‘能格性’の用語法を批判して、その代わりに‘語彙的能格性’と‘語彙的対格型システム’という用語を提案したことがある。しかしこれも、他言語に適用するさいには不都合が生じる可能性があるため、ここでは‘語彙的能格性’の代わりに‘意味的能格性’を用いて、本文の(3-5)のように厳密に定義した上で導入する。
- (5) 能格性が現れるレベルに関しては、この二つのレベル以外にも、たとえば、松本 (1986) では、形態論、統語論、談話構造の三つのレベルに区別できるとする。談話レベルにおける能格性とは、談話構造を支配するトピックの選択に関して、P が優先され、S と P がトピックになる形をいう。これに、本稿の提案を受け入れれば、形態・統語・意味・談話の四つのレベルにおける能格性ということもできよう。
- (6) 柴谷方良教授のご教示による。
- (7) Active-neutral の区別は、Sapir (1917) の active-inactive, Klimov (1973) の active-stative, Dixon (1979) の分裂主語システム (split-S system) と大体一致する (Merlan 1985 : 326, Mithun 1991 : 511 参照)。
- (8) 影山 (1993, 1996) も、日本語に関して同様の主張をしている。すなわち、受身を成立させるのは非対格ではなく非能格のみである。
- (9) この関係を影山 (1996 : 29) は次のように示してみた。

(i) 受身文の派生 : \_\_\_\_\_ was broken the glass to pieces.

↑ \_\_\_\_\_ ↓

非対格動詞の派生 : \_\_\_\_\_ broke the glass to pieces

↑ \_\_\_\_\_ ↓

- (10) 桐生和幸氏との個人談話によると、ネワール語の自他交替は自動詞から他動詞への派生が主流で、その逆の方向はあまり見られない、という。
- (11) 當野能之氏のご指摘（個人談話）による。
- (12) 英語の *There* 構文, *Way* 構文, 結果構文, 同族目的語構文, 擬似受身文など, 非対格性の統語的な証拠として取り上げられた構文をほぼすべて検討し, 非対格と非能格のような二項対立としては説明できないことを主張した論考として, 高見・久野 (2001) がある。
- (13) 影山 (1993: 59-60, 1996: 31) の分析によると, 非対格動詞は迷惑受身を許容しない。しかし高見・久野 (2001: 235-244) によれば, ‘夜中に子供に熱を出されて, 救急車を呼びました。’ や, ‘卒論の仕上げの大事な時期に, パソコンに壊れられて困ってしまった。’ のように, 影山では非対格と判断される動詞が迷惑受身文を可能にする例が多く取り上げられている。
- (14) 春庭の自動詞の二分類は三上 (1953) の能動詞・所動詞の区別とも大体対応する。
- (15) もちろん春庭はこのことを表だって主張してはいない。しかし, 春庭が提示した活用表を読むとこのことがわかる。このような観点から見ると, 最近の早津 (1989) の有対他動詞・無対他動詞の区別も, 実は春庭の自他区別ですでに明らかにされていたことであることがわかる。
- (16) *stand* の分析は, 鷲尾 (1997: 87) を参照した。
- (17) 岸本 (2000) は, 日本語に関して意志性のほかに完結性 (有界性) を非対格性の意味基準として取り上げている (cf. Van Valin 1990, Kishimoto 1996)。これも, 高見・久野 (2001) が指摘するように, 状態述語が問題となる。意図性から見ると, 状態述語は非対格であるが, 有界性がないことから見ると, 非能格になる。これに関して面白い事実が動格言語に見られる。状態述語が, 非対格として取り扱われる言語と非能格として取り扱われる言語の両方ともある (Mithun 1991)。詳細は次節を見られたい。なお, 動詞句のアスペクトに関しては, 三原 (2002) を参照されたい。
- (18) *ipta* : *iphita* ‘着る : 着せる’, *pesta* : *peskita* ‘脱ぐ : 脱がせる’, *sinta* : *sinkita* ‘履く : 履かせる’ など, 再帰動詞を中心とした一部の他動詞にはこの接辞が用いられる。詳細は鄭 (1999, 2004) を見られたい。Shibatani (2002) によれば, 形態的使役 (語彙的使役) は, 一般的に他動詞には働きにくいことが指摘されている。
- (19) 英語のように韓国語にも自他両用動詞 (*labile verbs*) がないわけではない。ただし, 韓国語の場合は英語のように状態変化動詞がその中心にあるのではない。むしろ *kwy-ka / lul mekta*. (lit. 耳が/を聞こえない), *tali-ka / lul tachita* (lit. 足が/を怪我した) のように, 身の上で起こったある不本意な事態またはその状態を表す場合や, *mom-i / ul wumcikita*. (体が動く, 体を動かす), *nwun-i / ul kkamppakkelta* (眼が/をぱちぱちする) のように, 身体部位 (または, 身体の上に着したスカート, スカーフのようなもの) の動的様態を表す場合が多い。また, 後者はオノマトペ動詞 ‘*mimetic verbs*’ が多い。従って, 形の面を重視して,

英語のように自他両用動詞だけを使役交替だとすると、韓国語の自他両用動詞は英語と意味的にずれてしまうので不都合が生じる。また、韓国語のように接辞を用いる派生動詞のみ自他交替と認めると、英語は *rise* と *raise* のようにごく少数の動詞しか当てはまらない。つまり、形式の選択は言語によって異なりうるが、意味は共有できる。従って、対照研究には形式を基準にするよりは意味を基準にしたほうがより有益である。ということで、自他交替を引き起こす動詞の(典型的な)意味を基準にすると、英語は自他両用動詞がそれを担い、韓国語は接辞を用いた派生動詞がそれを担う、ということである。

- (20) これも歴史的には、*tatta* から *tal-li-ta* (走る) への派生である可能性がある(李 1992, Park 1994参照)。*tatta* は現代語では単独では使えないが、*naytatta* (走り出す)、*chitatta* (駆け上がる) のように複合動詞としてはある。
- (21) 随伴使役には、同伴行為 (Joint-action)、補助 (Assistive)、監督 (Supervision) の三つの状況があり、これらは連続的である、とした Shibatani & Pardeshi (2002) および Shibatani & Chung (2002) を参照されたい。
- (22) 韓国語とほぼ同じサイズをもつものとして、マラティ語の使役接辞-*aw* がある。詳細は、Shibatani & Pardeshi (2002) を参照。
- (23) 語彙的または形態的使役に限る。
- (24) 実は、(34b) の英訳からわかるように、行為者格に対応するのは意図的事象のみではない。このような意味分布について、Comrie (1978: 356) は主語名詞句の行為者性の程度 (the degree of agentivity) —— またはコントロールの程度 (the degree of control) —— を設けて説明している。これによると、バツビ語は (i) と (ii) が同一に取り扱われ、行為者格をとり、他方の (iii) だけが別扱いにされ、非行為者格をとることになる。
- (i) 意図的に倒れたか；主語が絶対的なコントロールをもつ。
- (ii) 自分の不注意によって倒れたか(避けることができなかった)；中間的。主語が能力的にはコントロール性をもつ。
- (iii) 倒れたのは自分のコントロールの外にあり、全的に自分の過失によるものでない；コントロール性皆無。
- (25) DeLancey (1985) によれば、ラサ・チベット語 (Lhasa Tibetan) の格標示選択はコントロールを反映するが、助動詞選択は意図性に敏感である。Van Valin (1990) によれば、イタリア語の助動詞選択は活動性 (activity か non-activity か) が重要である。また、Zaenen (1993) によれば、オランダ語の助動詞選択はアスペクトに基づいている。鷲尾 (2002) によれば、古代日本語の助動詞ツ・ヌの選択もオランダ語に類似している。
- (26) ‘雨雨降れ降れ!’ のように、意志性に訴えることができなくても肯定命令が成り立つ場合がある。これは、よく知られているように命令文でなく願望文である。

- (27) 否定命令形が, '風邪をひくな' のように, とくに意志性を持たない経験者 (experience) のコントロール性をテストするためによく使われることを想起されたい (影山 1993, 1996: 88 など)。

### 参 考 文 献

- 青木 伶子 (1977) 「使役—自動詞・他動詞との関わりにおいて1—」『成蹊国文』10, 成蹊大学日本文学研究室。(須賀・早津 (編) 1995, 『動詞の自他』ひつじ書房。に再録)
- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, The University of Chicago Press.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Dordrecht: Reidel.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- 鄭 聖汝 (1999) 『他動性とヴォイス(態)—意味的他動性と統語的自他の韓日語比較研究—』博士学位論文, 神戸大学。
- 鄭 聖汝 (2004) 「意味を基盤とした韓日使役構文の分析—非規範的使役構文を手がかりとして—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第44巻, 91-139.
- 鄭 聖汝 (近刊) 『韓日語の使役・使役構文の類型論的研究—形式と意味の相関関係の機能論的アプローチ—』, くろしお出版。
- Comrie, Bernard (1976) "Review of Klimov 1973," *Lingua* 39. 252-9.
- Comrie, Bernard (1978) "Ergativity," W. P. Lehmann (ed.) *Syntactic Typology*, 329-394. Austin: University of Texas Press.
- DeLancey, Scott (1981) "An Interpretation of Split Ergativity and Related patterns," *Language* 57, 626-657.
- DeLancey, Scott (1985) "On Active Typology and the Nature of Agentivity," Frans Plank (ed.) *Relational Typology*, 47-60. Berlin: Mouton.
- Dixon, R. M. W. (1979) "Ergativity," *Language* 55, 59-138.
- Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*, CSL69, Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case," E. Bach and R. T. Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*, 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Harris, Alice C. (1982) "Georgian and the Unaccusativity Hypothesis," *Language* 58-2. 290-306.
- Haspelmath, Martin (1993) "More on the Typology of Inchoative/Causative Verb Alternations," *Causatives and Transitivity*, B. Comrie and M. Polinsky (eds.), Amsterdam: John Ben-

jamins.

- 早津恵美子 (1989) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて」『言語研究』95, 231-56.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房.
- 影山太郎 (1994) 「能格動詞と非対格動詞」『英米文学』39, 405-21. 関西学院大学.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』, 柴谷方良・西光義弘・影山太郎 (編) 『日英語対照シリーズ (5)』, くろしお出版.
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』33-70. ひつじ書房.
- Kishimoto, Hideki (1996) "Split Intransitivity in Japanese and the Unaccusative Hypothesis," *Language* 72, 248-286.
- 岸本秀樹 (2000) 「非対格性再考」丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』71-110. ひつじ書房.
- クリモフ, G. A. (1999) 『新しい言語類型論: 活格構造言語とは何か』石田修一 (訳), 三省堂.
- 李 善英 (1992) 『15世紀国語複合動詞研究』『国語研究』110号, 国語研究会, ソウル大学.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
- Lyons, John (1968) *An Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press. 国広哲彌 (監訳) 1973 『理論言語学』, 大修館書店.
- 松本克己 (1986) 「能格性に関する若干の普遍性」(特集 シンポジウム「能格性をめぐって」) 『言語研究』90.
- 丸山忠雄 (2000) 「動詞の語彙意味類型と語彙の拡張」丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』209-40. ひつじ書房.
- Merlan, Francesca (1985) "Split Intransitivity: Functional Oppositions in Intransitive Inflection," J. Nichols and A. Woodbury (eds.) *Grammar inside and outside the clause*, 324-362. Cambridge: Cambridge University Press.
- 三上章 (1953, 1972) 『現代語法序説—シンタクスの試み—』, くろしお出版.
- 三原健一 (2002) 「動詞類型とアスペクトと限定」『日本語文法』2-1号, 日本語文法学会. くろしお出版.
- Mithun, Marianne (1991) "Active/Agentive Case Marking and its Motivations," *Language* 67-3, 510-546.
- 宮岡伯人 (1986) 「エスキモー語の能格性」(特集 シンポジウム「能格性をめぐって」) 『言語研究』90.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese*.

New York: Academic Press.

本居春庭 (1828) 『詞の通路上』 島田昌彦解説, 勉誠社文庫 25.

Pardeshi, Prashant (2002) " 'Responsible' Japanese vs. 'Intentional' Indic: A Cognitive Contrast of Non-intentional Events," 『世界の日本語教育』 12, 日本国際交流基金.

Park, Jeong-woo (1994) *Morphological Causatives in Korean: Problems in Grammatical Polysemy and Constructional Relations*. Ph. D., University of California at Berkeley.

Perlmutter, David (1978) "Impersonal Passive and the Unaccusative Hypothesis," *BLS* 4, 157-189.

Perlmutter, David and Paul Postal (1984) "The 1-Advancement Exclusiveness Law," D. Perlmutter and C. Rosen (eds.) *Study in Relational Grammar* 2, 81-125. University of Chicago Press.

Pullum, Geoffrey (1988) "Citation Etiquette Beyond Thunderdome," *Natural Language & Linguistic Theory* 6: 579-88.

Rocen, Carol G. (1984) "The Interface between Semantic Roles and Initial Grammatical Relations" in D. Perlmutter and C. Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar* 2, 38-77. Chicago: University of Chicago Press.

柴谷方良 (1986) 「能格性をめぐる諸問題」(特集 シンポジウム「能格性をめぐって」) 『言語研究』 90.

Shibatani, Masayoshi (ed.) (1988) *Passive and Voice*, Amsterdam: John Benjamins.

柴谷方良 (1989) 『英語学の関連分野: 言語類型論』 英語学体系6, 大修館書店.

Shibatani, Masayoshi (1998) "Voice parameters," L. Kulikov & H. Vater (eds.) *Typology of Verbal-Categories*, 117-138. Tbingen: Max Niemeyer. (*Kobe papers in Linguistics* 1, 神戸大学文学部言語学研究室. 93-111. にも収録.)

柴谷方良 (2000) 「ヴォイス」 仁田義雄他 (著) 『文の骨格』, 岩波書店. 117-186.

Shibatani, Masayoshi (2000) "Issues in transitivity and voice: A Japanese perspective," 『五十周年記念論文集』, 523-586. 神戸大学文学部.

Shibatani, Masayoshi (2002). "Introduction: Some Basic Issues in the Grammar of Causation," M. Shibatani (ed) *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*, TSL48, John Benjamins.

Shibatani, Masayoshi and Chung, Sung Yeo (2002) "Japanese and Korean Causatives Revisited," N. Akatsuka & S. Strauss (eds) *Japanese/Korean Linguistics* 10. CSLI & SLA. (『神戸言語学論叢』 3号, 神戸大学文学部言語学研究室. に完全版収録.)

Shibatani, Masayoshi and Pardeshi Prashant (2002). "The Causative Continuum," M. Shibatani

- (ed) *The Grammar of Causation and Interpersonal manipulation*, TSL48, John Benjamins. (『神戸大学言語学論叢』3号. 神戸大学言語学研究室. に再録.)
- 高田昌彦 (1979) 『国語における自動詞と他動詞』, 明治書院.
- 高見健一・久野暉 (2001) 『日英語の自動詞構文』, 研究社.
- Tsunoda, Tasaku (1988) "Antipassive in Warrungu and other Australian languages," M. Shibatani (ed.) *Passive and Voice*, 595-649. Amsterdam: John Benjamins.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』, くろしお出版.
- Van Valin, Robert D. (1990) Semantic Parameters of Split Intransitivity. *Language* 66. 264-279.
- 鷲尾龍一・三原健一 (1997) 『ヴォイスとアスペクト』中右実 (編) 『日英語比較選書』7, 研究社.
- 鷲尾龍一 (2002) 「上代日本語における助動詞選択の問題 —— 西欧諸語との比較から見えるもの ——」 『日本語文法』2-1号, 日本語文法学会. くろしお出版.
- Zeeen, Anne (1993) "Unaccusativity in Dutch: Integrating Syntax and Lexical Semantics," J. Pustejovsky (ed.) *Semantics and Lexicon*, 129-61. Kluwer Academic Publishers.

**The True Nature of Split Intransitives****—The unaccusative hypothesis as viewed from a typological perspective and the problems related to it—****Chung Sung Yeo**

The goal of this paper is to explicate the true nature of split intransitives. To achieve this goal we explored the experiential basis of the unaccusative hypothesis and arrived at the following conclusions:

1. The passive, including the impersonal passive and adversative passive, is primarily based on the activity verbs ( $S_a=A$ ) and undergoes generalization accommodating change of state verbs ( $S_p=P$ ) verbs as well (Cf. Shibatani 1998).
2. The causative alternation is primarily based on change of state verbs ( $S_p=P$ ) and undergoes generalization accommodating the activity verbs ( $S_a=A$ ) (Cf. Shibatani & Pardeshi 2002).
3. The split intransitive system in active languages is based on at least two different semantic criteria (Cf. Mithun 1991).

From the results mentioned above we propose the following claims:

4. The behaviour of the intransitives is not a dichotomy as envisaged by the unaccusative hypothesis. The groupings are non-homogeneous and form a continuum rather than a dichotomy. Further, the size of each group varies from one language to another. In order to capture these facts we propose the following terms: Semantic Nominative-accusative system and Semantic Ergative-absolutive system. These terms are precisely defined and introduced drawing a systematic parallel with the case-making systems.
5. In relation to 3 above, developing the proposal of Mithun (1991), we propose a “speaker’s viewpoint” parameter related to the origination of a state of affairs. Even in the active languages, we do not find the ideal active-inactive dichotomy pattern as envisaged by the unaccusative hypothesis. We claim that the “speaker’s viewpoint” parameter proposed herein varies from one language to another and therefore the so-

called universal, single parameter based unaccusative hypothesis is in fact not universal.